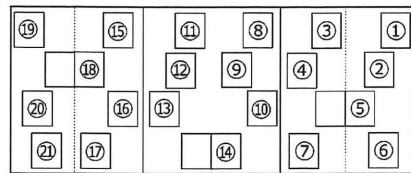


住吉物語貼交屏風

学習院大学史料館蔵
六曲一隻
江戸時代前期
横 303.6cm 高 163.5cm



奈良絵本『住吉物語』の絵の部分のみを切り出し、縦163.5cm×横303.6cmの屏風に貼ったものである。物語の流れに沿って、各絵に番号を付した図を掲げる。



全二十一場面を描いた絵の寸法は、ほとんどのものが縦28.2～28.5cm×横22.8cm～23.0cmだが、⑤のみ、縦29.2cm×横23.5cmであることから、元の冊子の大きさはこれより大きく、縦は30.0cmあったであろうと推測できる。一説によると、安土桃山時代から江戸のごく初期に、このような大型奈良絵本が作られたという。また、古い研究では天文年間(1532～1555)に大型で絵の多い美本が作られたとされる。これらのことから、当該屏風に貼られている絵は江戸初期を下ることはないといえる。また、おげ(紙の蝶番)の様子から、屏風装にされたのは江戸末期あるいは近代か。残存状態は悪くはないが、人の顔など、胡粉が剥がれている箇所が多い。しかし、人物の手足の五指や几帳や襖の絵、人物たちの着物の模様が描き込まれ、また、

着物の輪郭や模様、馬の装飾、御簾の淵が金泥で描かれており、絵そのものは良い。

『住吉物語』は、原本本が円融朝(969～984)のころの成立である。『枕草子』『物語は』段、『源氏物語』『蜚』巻に住吉物語の名がみえることから、広く読まれていたらしい。しかし、現存するのは改作本であり、これは、『無名草子』以降『風葉和歌集』以前の13世紀中に成立したとも、一条朝(10世紀～11世紀初頭)の成立だとも言われている。『住吉物語』の本文の種類は100種を越えているが、探索型継子いじめ物語という大筋は変わらない。左衛門督を兼任する中納言の官腹の姫君が母を亡くした後、継母に疎まれて三度にわたって結婚を妨害される。危険を感じた姫君は乳母子の伝手で住吉に身を隠すが、長谷寺で姫君の居場所の夢告を受けた四位の少将に見いだされ、迎え入れられる。京に戻った姫君は家族と再会し、継母を除いた人々は繁栄する。

さて、当該屏風だが、絵のみであるためにどの系統の本文についていた絵なのか定かではなく、また、絵を貼る順番にも錯簡があるように見受けられる。なお、一つの作品では、人物によって衣が決まっていることが多いが、この屏風にある絵は、人物によって衣が定まっているわけではない。不確かな点が多いが、右に、各場面の簡単な紹介をする。

- ①母宮を亡くした姫君が中納言邸に引き取られ、三姉妹が揃う。(挿図1)
- ②四位の少将が筑前を使いにして姫君に文を書く。
- ③継母が謀略をめぐらし、筑前に「白袿」を渡す。(挿図2)
- ④少将から姫君への文を筑前が三の君に渡す。
- ⑤正月十日に、春の嵯峨野に出かける三姉妹の様子を四位の中将が覗く。
- ⑥詳細不明。あるいは、姫君が住吉に下ったのち、父中納言に文と長歌を送った場面か。
- ⑦四位の少将が、三の君の許で姫君の琴の音に気付く場面。
- ⑧姫君の許に何度も赴く少将。少将に応じているのは乳母子の侍従。
- ⑨継母の謀略を知らない父中納言が姫君たちと話す。
- ⑩姫君が妹たちにそれとなく別れを言う。
- ⑪(右上)少将が姫君の許を訪れる。／(左下)住吉の尼が上京する。
- ⑫中納言邸での尼君、姫君、侍従、乙若。
- ⑬姫君の出奔を知った父中納言の嘆き。
- ⑭少将の鞍馬参詣。
- ⑮姫君からの文を持ってきた童を父中納言が探させる。
- ⑯姫君、住吉にて箏の琴を弾く。
- ⑰中將となった男君、琴の音に誘われて姫君を見出す。
- ⑱姫君と逢った中將、お迎えの人々とともに遊覧する。(挿図3)
- ⑲姫君と男君の子どもたちの袴着の儀。
- ⑳姫君の行方を知らされていない父大納言、姫君の娘が姫君に似ていて泣く。その様子を御簾越しに見る姫君と侍従。
- ㉑父大納言、姫君と再会する。

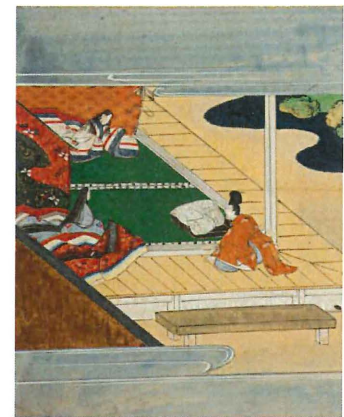
これらの中で特徴のある場面を紹介する。まず、①の場面だが、左上に書かれている姫君の頭に、鳥帽子の下絵の線が見えることから、もともとは、版本絵のような、父の中納言と三姉妹という構図だったのだろう。

②③では、橙色の衣を着た男性が描かれているが、ここは、本文の異同があり、「筑前」という文使いが女性として描かれる場合と男性として描かれる場合がある。当該屏風の絵では「筑前」は男性として描かれているため、この絵とともにあったであろう本文は、古活字本系統であっただろうと考えられる。

⑥の場面は、同じ古活字本系統の本文である横型奈良絵本の『住吉物語』(日本語日本文学科所蔵)に似た場面がある。そこでは、住吉に隠れた姫君からの文を童が運び、父中納言宅にいる「半若」に渡す場面として描かれている。仮に、この絵が姫君からの文と長歌を送られる場面だとした場合、この絵は⑭と⑮の間に



挿図1 中納言邸での三姉妹



挿図2 継母、筑前に衣を渡す



挿図3 姫君と男君の遊覧

入るべきである。

⑱の場面のように、物語の終盤で姫君が舟に乗る構図はよく描かれる。しかし、その多くは少将と姫君とお付きの者たち、あるいは、姫君とお付きの者たちであり、ここに住吉に残ったはずの尼君が同乗しているのは不思議である。

今回、史料館所蔵の住吉物語貼交屏風は、古活字本系に近い本文であることがわかった。これらの絵をより詳細に調べ、ともにあったはずの本文の系統が確認できれば、⑥や⑱の絵の不審点も解決できるだろう。

(日本語日本文学科非常勤講師 武藤那賀子)

